



GILLETTE の人々

FERDINANDO FREGA · GILLETTENARRATIVE · GILLETTEVATICANO · 08/17

神って聞いたことがあるか。あいつはそれに似ている、ただし髭剃りの刃を売る。もちろん、これは冗談だ。

Gillette の男は聖人として生まれるのではない。大きな組織の内側で生まれる。そこから彼は規律を、方法を、消費者への敬意を、細部への注意を、そして世界を観察してその変化を理解する能力を学ぶ。彼はこれらの教を「母なる Gillette」から吸収し、個人的で、自由で、深く人間的な何かに変える。

彼は誇示せずに物語る。遮らずに聴く。支配せずに築く。他人が別々だと見るものをつなぐ。彼が差し出すのは地図であって、目的地ではない。

だからあなたは、彼が身につけているロゴで彼を見分けるのではない。彼が世界を見るその見方で見分けるのだ。

そして彼に出会えば、めったに忘れない。毎日つける香りのように。最初のひと引きで分かる刃のように。自分の内側で生きつづける物語のように。

Gillette の女は同じ学校から出てきたのではない。男と同じ特質を持ってはいない。彼女のほうが有能だ。一つではなく、三つの知性を通して生きているからだ。理性的で論理的なもの。情緒的で愛情深いもの。直観的なもの。三つ。完全な数だ。

しかも彼女が私たちをこの世に送り出すとき、私たちが彼女にもう少し似ることを許すあの X 因子の一部を受け渡す。だがしばしば Y 因子は他の因子との正しい調和を見つけそこなう。そして純粋なものとして生まれたものが強度を失う。

Gillette の女は、見せびらかす必要なしに強さを知っている。恥じることなく脆さを知っている。言われていることを読み取れる。そして言われずにいることも。

彼女は他人が見落とす細部に気づく。アイデアをつなぐより先に人をつなぐ。他人が国境をどこに引くかで言い争っているあいだに、橋を架ける。

だからあなたは、彼女が就いている地位で彼女を見分けるのではない。彼女があとに残す痕跡で見分けるのだ。静かで。深く。長くとどまる。最良の物語のように。

そしておそらくそれは、あらゆる鏡がそれぞれの女の内なる父を映し返すからだ。

彼は地図を差し出す。彼女は痕跡を残す。二人のどちらも、身につけているもので見分けられることはない。二人とも、部屋を出たあとにその部屋に残るもので見分けられる。

ひと言で言うなら――

Ferdinando